

大学生のスポーツ実技科目の履修動機と運動有能感

中野 裕史

Motivation in Sports Class Participation and Physical Competence in University Students

Hiroshi Nakano

(2016年11月25日受理)

緒 言

スポーツ振興は日本の国家戦略であり、スポーツ基本法にはスポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことが国民の権利であることが記されている。大学における体育・スポーツは、初等中等教育の時期と社会人とをつなぎ、生涯にわたるスポーツ習慣を形成・定着させる役割を持つ(文部省, 1998)ことからスポーツ振興に重要な意味を持っている。

高田(1980, 1983)は、学習者の求める良い体育の授業の4つの条件として、精一杯運動をさせてくれる授業、技や力を伸ばしてくれる授業、友人と仲よく学習させてくれる授業、何かを新しく発見させてくれる授業を提示し、これらを小学校・中学校・高等学校・大学で共通する良い授業の4原則(高田4原則)とした。高田4原則の基盤は「運動の楽しさ」であり、精一杯運動することは、自ら体を動かし、一定量の運動量に達したときの爽快感により「動く楽しさ」をもたらし、技や力を伸ばすことは、自分が進歩し、授業毎に新しい自分、違った自分が出現する実感により「伸びる楽しさ」をもたらし、友人と仲良く学習することは、仲間と親しく付き合い、生きる喜びを感じ取ることにより「集う楽しさ」をもたらし、何かを新しく発見することは、学習を通してスポーツに関する何か新しい知識や考え方を発見したときの喜びや驚きにより「解かる楽しさ」をもたらすことを述べている。

運動の楽しさは、大学におけるスポーツ実技科目の履修動機の約51%を占めていることから(天田・青木, 2010)、このような運動の楽しさを実感することは生涯にわたるスポーツ習慣を形成・定着させるために重要な動機となることが考えられる。また、運動の楽しさと運動有能感には関連がある(岡澤・諏訪, 1998)ことから、運動有能感の持ち方によってはスポーツ実技科目の履修にあたって重視する楽しさが異なるかもしれない。

そこで本研究は、高田4原則の基盤である4つの楽しさの条件の中で、スポーツ実技科目の履修動機として大学生が最も重視する楽しさは何かを性別、履修形態別、また運動有能感などの観点から明らかにすることを目的とした。

方 法

1. 対象者

対象者は、A大学のスポーツ実技科目を履修した1年生546名であり、その内、教員免許必修科目(以下必修)に該当する者が216名、教員免許選択必修科目(以下選択)に該当する者が203名、選択科目(以下選択)に該当する者が127名であった。履修率は必修が100%(216名中216名履修)、選必が80.6%(252名中203名履修)、選択が51.2%(248名中127名履修)であった。

対象者546名中、有効回答の得られた517名(男性76名、女性441名)を分析対象とした。その内、必修に該当する者は207名(男性2名、女性205名)、選必に該当する者は192名(男性31名、女性161名)、選択に該当する者は118名(男性43名、女性75名)であった。

2. 調査内容

1) スポーツ実技科目で重視する楽しさ

スポーツ実技科目で重視する楽しさを、動く楽しさ(以下動く)、伸びる楽しさ(以下伸びる)、集う楽しさ(以下集う)、解かる楽しさ(以下解かる)の4つの内から、最も重視する順に1位から4位まで順位づけさせた(表1)。さらに、1位は4点、2位は3点、3位は2点、4位は1点に点数化してスコアを求めた。

2) 運動有能感

運動有能感について「よくあてはまる」5点から「まったくあてはまらない」1点の5段階評価で点数化してスコアを求めた。また、下位因子である自己の運動能力、運動技能に対する肯定的認知に関する因子(身体的有能さの認

表1 スポーツ実技科目で重視する楽しさ

項目	順位
精一杯運動すること (動く楽しさ) 自ら体を動かさそうとして運動を続け、一定量の運動量に達したときの爽快感.	位
技や力を伸ばすこと (伸びる楽しさ) 自分が進歩しつつあり、授業毎に新しい自分、違った自分が出現する楽しさ.	位
友人と仲良く学習すること (集う楽しさ) 仲間と親しく付き合い、生きる喜びを感じ取る楽しさ.	位
何かを新しく発見すること (解かる楽しさ) 学習を通して体育・スポーツに関する何か新しい知識を発見したときの喜びや、体育・スポーツの見方考え方に新たな方向を見いだしたときの驚き.	位

知)、自己の努力や練習によって運動をコントロールできるという認知に関する因子(統制感)、運動場面で教師や仲間から受け入れられているという認知に関する因子(受容感)のスコアも求めた(岡沢ほか, 1996)(表2).

3. 統計処理

統計処理には SPSS Statistics Ver.21 を用いた. 統計量は平均値±標準偏差として示し, 有意水準は $p < 0.05$ とした.

結果と考察

1. スポーツ実技科目で重視する楽しさ

1) 性別

χ^2 検定の結果, 男子学生は動く楽しさを1位に挙げた者が多く(55.3%), 女子学生は集う楽しさを1位に挙げた者が多かった(54.6%) ($\chi^2 = 8.619$, $df = 3$, $p < 0.05$). なお, 男子学生で解かる楽しさを1位に挙げた者はいなかった(表3). 性と楽しさのスコアを条件とする2要因分散分析の結果, 楽しさの主効果 ($F(3, 1545) = 266.0$, $p < 0.01$), 交互作用が有意であり ($F(3, 1545) = 3.4$, $p < 0.05$), Bonferroni法による下位検定の結果, 男子学生の動く楽しさのスコア (3.4 ± 0.8) は女子学生 (3.2 ± 0.8) よりも高く ($p < 0.05$), 女子学生

表3 性別の1位に挙げた楽しさの人数 (%)

	動く	伸びる	集う	解かる	総計
男	42 (55.3%)	4 (5.3%)	30 (39.5%)	0 (0%)	76 (100%)
女	173 (39.2%)	18 (4.1%)	241 (54.6%)	9 (2.0%)	441 (100%)
総計	215 (100%)	22 (100%)	271 (100%)	9 (100%)	517 (100%)

%値は小数点第2位を四捨五入している.
 $\chi^2 = 8.619$, $df = 3$, $p < 0.05$

表2 運動有能感

項目	よくあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
運動能力が優れていると思う.	5	4	3	2	1
たいていの運動は上手にできる.	5	4	3	2	1
練習をすれば, 必ず技術や記録は伸びると思う.	5	4	3	2	1
努力さえすれば, たいていの運動は上手にできると思う.	5	4	3	2	1
運動している時, 先生が励ましたり応援してくれる.	5	4	3	2	1
運動している時, 友達が励ましたり応援してくれる.	5	4	3	2	1
一緒に運動をしようと誘ってくれる友達がいる.	5	4	3	2	1
運動の上手な見本として, よく選ばれる.	5	4	3	2	1
一緒に運動する友達がいる.	5	4	3	2	1
運動について自信を持っているほうである.	5	4	3	2	1
少し難しい課題でも, 努力すればできると思う.	5	4	3	2	1
できない運動でも, あきらめなくて練習すればできるようになると思う.	5	4	3	2	1

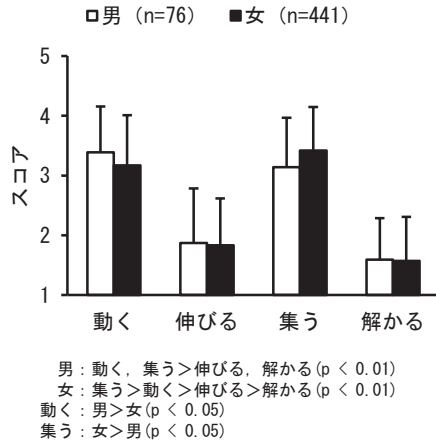


図1 性別の楽しさのスコア

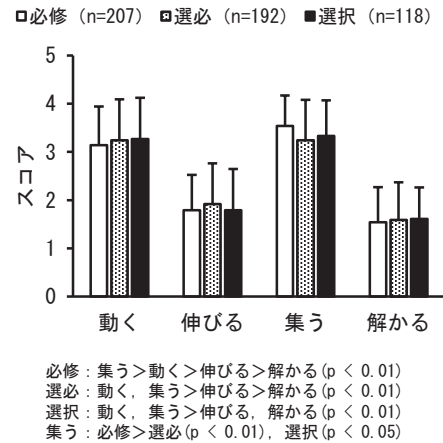


図2 履修形態別の楽しさのスコア

の集う楽しさのスコア (3.4 ± 0.8) は男子学生 (3.1 ± 0.7) よりも高かった (p < 0.05) (図1)。したがって、男子学生はスポーツ実技科目で動く楽しさを、女子学生は集う楽しさを重視すると考えられる。

2) 履修形態別

χ²検定の結果、履修形態と楽しさの順位には関連がみられなかったものの (表4)、履修形態と楽しさのスコアを条件とする2要因分散分析の結果、楽しさの主効果 (F (3, 1542) = 513.2, p < 0.01), 交互作用が有意であり (F (6, 1542) = 2.7, p < 0.05), Bonferroni法による下位検定の結果、必修の学生の集う楽しさのスコア (3.5 ± 0.6) は選必 (3.2 ± 0.8, p < 0.05), 選択 (3.3 ± 0.7; p < 0.01) の学生よりも高かった (図2)。したがって、スポーツ実技科目が必修の学生は集う楽しさを重視すると考えられる。本調査では必修の学生のほとんどが女子学生であること (男性2名, 女性205名), また、本来は履修を望まないが、教員免許取得のために履修した者もいると考えられることから、せめて仲間と親しく付き合う楽しさをスポーツ実技科目に求めているのかもしれない。

表4 履修形態別の1位に挙げた楽しさの人数 (%)

	動く	伸びる	集う	解かる	総計
必修	72 (34.8%)	7 (3.4%)	124 (59.9%)	4 (1.9%)	207 (100%)
選必	87 (45.3%)	11 (5.7%)	90 (46.9%)	4 (2.1%)	192 (100%)
選択	56 (47.5%)	4 (3.4%)	57 (48.3%)	1 (0.8%)	118 (100%)
総計	215 (100%)	22 (100%)	271 (100%)	9 (100%)	517 (100%)

%値は小数点第2位を四捨五入している。
 χ² = 9.915, df = 6, n. s.

2. 運動有能感

1) 性別

t検定の結果、男子学生の身体的有能さの認知 (13.6 ± 3.6), 統制感 (16.2 ± 3.2), 運動有能感 (45.7 ± 7.9) は女子学生よりも高かった (各10.5 ± 3.6; p < 0.01, 15.1 ± 2.7; p < 0.01, 41.5 ± 7.3; p < 0.01) (図3)。この結果は先行研究 (岡沢ほか, 1996) と同様であった。

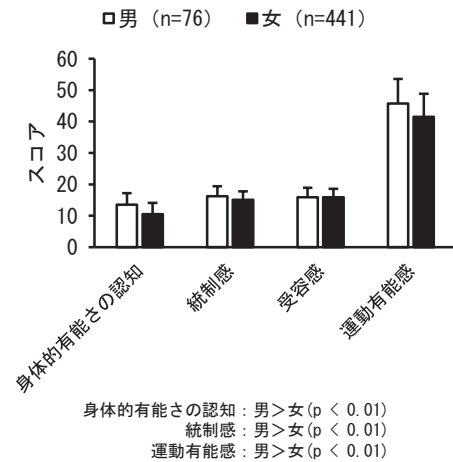


図3 性別の運動有能感

2) 履修形態別

履修形態を条件とする1要因分散分析の結果、身体的有能さの認知 (F (2, 514) = 18.2, p < 0.01), 統制感 (F (2, 514) = 6.9, p < 0.01), 受容感 (F (2, 514) = 3.6, p < 0.05), 運動有能感 (F (2, 514) = 14.0, p < 0.01) とともに主効果が有意であった。Bonferroni法による下位検定の結果、身体的有能さの認知において選択の学生 (12.7 ± 3.8) は必修 (10.3 ± 3.6, p < 0.01), 選必 (10.6 ± 3.6; p < 0.01) の学生よりも高く、統制感において選択の学生 (16.0 ± 2.9) は必修 (14.8 ± 2.8, p < 0.01) の学生よりも高く、受容感において選択の学生 (16.5 ± 3.0) は必修 (15.7 ± 2.8, p < 0.01) の学生より

も高く、運動有能感において選択の学生(45.2±7.8)は必修(40.7±7.7, p<0.01), 選必(41.8±6.8; p<0.01)の学生よりも高かった(図4). したがって、選択科目のスポーツ実技を履修する学生には運動有能感が高い者が多いと考えられる.

さらに、性と履修形態を条件とする2要因分散分析の結果、性の主効果(F(1, 511)=4.0, p<0.05), 履修形態の主効果(F(2, 511)=3.4, p<0.05)が有意であり、交互作用は有意でなかった. Bonferroni法による下位検定の結果、選択の女子学生の運動有能感(44.4±6.6)は必修(40.7±7.7, p<0.01), 選必(41.3±7.0; p<0.01)の女子学生よりも高く、男子学生(必修46.5±5.0, 選必44.5±5.0, 選択46.6±9.5)と差が認められなかった(図5). したがって、選択科目のスポーツ実技を履修する女子学生は男子学生と同程度の運動有能感を持つと考えられる.

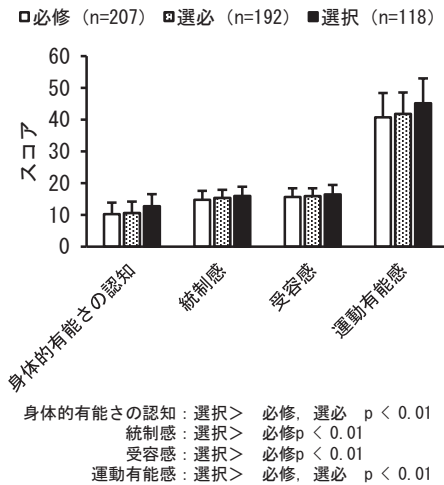


図4 履修形態別の運動有能感

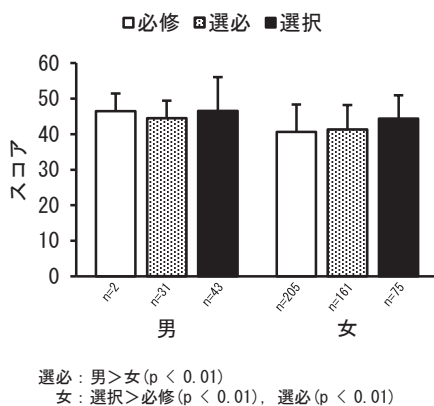


図5 性および履修形態別の運動有能感

3. スポーツ実技科目に求める楽しさと運動有能感

1) 性別

性と1位に挙げた楽しさのスコアを条件とする2要因

分散分析の結果、身体的有能さの認知において、性の主効果(F(1, 510)=16.5, p<0.01), 交互作用が有意であり(F(2, 510)=3.2, p<0.05), Bonferroni法による下位検定の結果、女子学生で動く楽しさを1位に挙げた者の身体的有能さの認知(11.4±3.6)は、集う楽しさを1位に挙げた者(9.8±3.4)よりも高かった(p<0.01). 統制感においては、性の主効果(F(1, 510)=6.1, p<0.05), 1位に挙げた楽しさの主効果(F(3, 510)=3.9, p<0.01), 交互作用(F(2, 510)=3.4, p<0.05)ともに有意であり、Bonferroni法による下位検定の結果、女子学生で動く楽しさ、伸びる楽しさを1位に挙げた者の統制感(各15.8±2.1; p<0.01, 16.9±2.0; p<0.01)は、集う楽しさを1位に挙げた者(14.5±2.9)よりも高かった. 受容感においては、交互作用のみ有意であり(F(2, 510)=4.7, p<0.01), Bonferroni法による下位検定の結果、女子学生で動く楽しさを1位に挙げた者の受容感(16.4±2.6)は、集う楽しさを1位に挙げた者(15.6±2.7)よりも高かった(p<0.01). 運動有能感においては、性の主効果(F(1, 510)=7.5, p<0.01), 交互作用が有意であり(F(2, 510)=5.4, p<0.01), Bonferroni法による下位検定の結果、女子学生で動く楽しさ、伸びる楽しさを1位に挙げた者の運動有能感(各43.6±6.7; p<0.01, 44.8±7.3; p<0.05)は、集う楽しさを1位に挙げた者(39.9±7.3)よりも高かった(図6). したがって、運動有能感が高い女子学生は動く楽しさ、伸びる楽しさを重視し、運動有能感が低い女子学生は集う楽しさを重視すると考えられる.

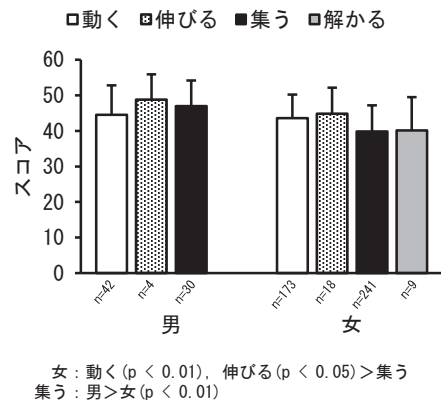


図6 性および1位に挙げた楽しさ別の運動有能感

2) 履修形態別

履修形態と1位に挙げた楽しさのスコアを条件とする2要因分散分析の結果、身体的有能さの認知において、履修形態の主効果(F(2, 505)=10.2, p<0.01), 1位に挙げた楽しさの主効果(F(3, 505)=5.5, p<0.01), 交互作用(F(6, 505)=2.8, p<0.05)ともに有意であり、Bonferroni法による下位検定の結果、必修

の学生では動く楽しさを1位に挙げた者の身体的有能さの認知(11.3±3.5)が、集う楽しさ(9.9±3.6; p<0.05)、解かる楽しさ(6.0±1.6; p<0.05)を1位に挙げた者よりも高く、選必の学生では動く楽しさ(11.5±3.5, p<0.01)、伸びる楽しさ(12.5±4.1, p<0.05)を1位に挙げた者の身体的有能さの認知が、集う楽しさを1位に挙げた者(9.4±3.3)よりも高かった。統制感において、1位に挙げた楽しさの主効果のみ有意であり(F(3, 505) = 9.4, p<0.01)、Bonferroni法による下位検定の結果、動く楽しさ(p<0.01)、伸びる楽しさ(p<0.01)を1位に挙げた学生の統制感が、集う楽しさを1位に挙げた者よりも高かった。受容感においては、履修形態の主効果、1位に挙げた楽しさの主効果、交互作用ともに有意でなかった。運動有能感において、履修形態の主効果(F(2, 505) = 6.6, p<0.01)、1位に挙げた楽しさの主効果(F(3, 505) = 7.0, p<0.01)が有意であり、交互作用は有意でなかった。Bonferroni法による下位検定の結果、動く楽しさ(p<0.01)、伸びる楽しさ(p<0.05)を1位に挙げた学生の運動有能感が、集う楽しさを1位に挙げた者よりも高かった(図7)。したがって、履修形態にかかわらず運動有能感が高い学生は動く楽しさと伸びる楽しさを重視し、運動有能感が低い学生は集う楽しさを重視すると考えられる。

る4つの楽しさの順位や軽重について言及していないが、本研究結果から、性別、履修形態別、また運動有能感の持ち方によって重視する楽しさが異なることが示唆された。

文 献

天田英彦・青木敦英(2010) 大学体育実技の履修に関する実態調査—スポーツ科学演習の受講状況から—。流通科学大学論集, 23: 87-95.
 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎(1996) 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究。スポーツ教育学研究, 16: 145-155.
 岡沢祥訓・諏訪祐一郎(1998) 「運動の楽しさ」と「運動有能感」との関係。体育科教育, 46: 44-46.
 高田典衛(1980) 私の考える体育のよい授業について。体育の科学, 30: 288-292.
 高田典衛(1983) よい体育授業の構図。大修館書店, p45.
 文部省(1998) 心と体の健康とスポーツ。我が国の文教施策。

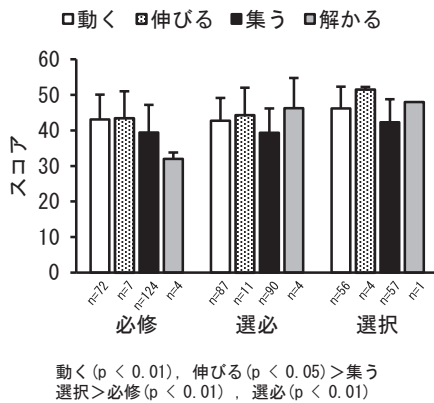


図7 履修形態および1位に挙げた楽しさ別の運動有能感

まとめ

スポーツ実技科目を履修した大学生を対象に、履修動機として重視する楽しさと運動有能感を調査した結果、①男子学生は動く楽しさを重視し、女子学生は集う楽しさを重視すること、②必修科目の学生は集う楽しさを重視すること、③選択科目のスポーツ実技を履修する女子学生は運動有能感が高いこと、④運動有能感が高い学生は動く楽しさ、伸びる楽しさを重視し、運動有能感が低い学生は集う楽しさを重視することが明らかとなった。

高田は、学習者の求める良い授業の4原則の基盤であ